

日本英文学会 中国四国支部 第 77 回大会 プログラム・梗概

会期：2025 年 10 月 25 日（土）、26 日（日）

共催：高知県立大学・高知県立大学文化学部

会場：高知県立大学永国寺キャンパス
〒780-8515 高知市永国寺町 2 番 22 号

日本英文学会中国四国支部 事務局

〒739-8524 広島県東広島市鏡山 1-1-1
広島大学大学院人間社会科学研究科西原貴之研究室内
TEL 082-424-7061

第一日 10月25日(土) (参加受付 12:30ー)

開会式・総会 (12:45-13:15 教育研究棟1階 A101 教室)

開会の辞	(司会) 高知県立大学教授	五百藏 高 浩
挨拶	日本英文学会中国四国支部支部長	小 野 章
	高知県立大学文化学部長	三 浦 要 一
総 会		

研究発表 (13:30-15:40)

第1発表 13:30-14:10 第2発表 14:15-14:55 第3発表 15:00-15:40

第1室 (教育研究棟2階 A210 教室)

	(司会) 近畿大学准教授	西 尾 美由紀
1. <i>Anne of Green Gables</i> における green が伝える意味	徳島大学大学院博士前期課程	中 畑 明 理
2. 『リトル・ドリット』における『さすらい人』に対する引喩 —救助の働きをする引喩としての『さすらい人』—	無職	定 行 あし江
	(司会) 広島大学教授	大 野 英 志
3. (招待発表) Way 構文の多様性と創造性について—drink one's way を中心に—	高知県立大学教授	金 澤 俊 吾

第2室 (教育研究棟1階 A101 教室)

	(司会) 安田女子大学准教授	田多良 俊 樹
1. 『ユリシーズ』十八挿話におけるモリーの過去 —ジブラルタル・ノスタルジア・異種混雑性—	熊本高等専門学校准教授	岩 下 いずみ
2. <i>Ulysses</i> における病とケア—第18挿話“Penelope”を中心に—	熊本保健科学大学准教授	田 中 恵 理
3. モリー・ブルームは、なぜ歌手なのか? —『ユリシーズ』第18挿話における歌の分析—	愛知淑徳大学非常勤講師	山 田 幸 代

第3室（教育研究棟1階 A109教室）

- (司会) 県立広島大学准教授 栗原武士
1. *The Great Gatsby* における父性の揺らぎとサバイバーズ・ギルト
広島大学大学院博士課程前期 渡部智成
 2. アーネスト・ヘミングウェイの「兵士の故郷」における「吐き気」と語りの抑圧
広島大学大学院博士課程後期 秀島由里子
 3. 『ハックルベリー・フィンの冒険』における水と想像力
(司会) 島根県立大学教授 藤吉知美
甲南大学准教授 浜本隆三

第4室（教育研究棟1階 A110教室）

- (司会) 広島大学教授 小野章
1. 英語習熟度の異なる学習者ペアによる英語詩の読解プロセスの分析
—教材開発に向けた基礎的検証—
広島大学大学院博士課程後期 形山羽奈
 2. Social Learning Spaces in a Japanese University: A Study of Awareness, Usage, and Barriers
岡山大学大学院博士後期課程 Wang Jingzhou
 3. 日本の世界遺産資料に関わるエコ・コミュニケーション分析
—英語を通じた環境教育への貢献を目指して—
岡山大学専任講師 吉田安曇

特別講演（16:00-17:00） 教育研究棟1階 A101教室）

(司会) 広島大学教授 西原貴之

演題 物語による英語教育が育てる不確定性有能性 (Negative Capability)

—対話性・異言混交性・多声性そして可能性—

講師 京都大学教授 柳瀬陽介

懇親会（17:30-19:30）

会場 高知県公立大学生協永国寺キャンパス食堂

会費 5,000円

※日本英文学会中国四国支部ホームページよりお申し込みください。

第二日 10月26日(日)

シンポジウム (10:00-13:00 教育研究棟1階 A101 教室)

題目 終わりのなき怪談—ラフカディオ・ハーンと再創造の力—

霊性の文学の復権—震災後文学として怪談を読む—

(司会・講師) 島根大学准教授

宮 澤 文 雄

ホーイチからホーライへ—〈裸の詩〉としての『怪談』—

(講師) 明海大学講師

横 山 竜一郎

Ghostly な交流が生む創造の連鎖—怪談物語のダイナミズム—

(講師) 福岡女子大学教授

長 岡 真 吾

現代に生きる怪談—「つながりの文学」としての意味—

(講師) 小泉八雲記念館館長・島根県立大学名誉教授

小 泉 凡

閉会式 (13:00- 教育研究棟1階 A101 教室)

(司会) 日本英文学会中国四国支部事務局長

西 原 貴 之

閉会の辞

日本英文学会中国四国支部副支部長

大 野 英 志

第一日 — 研 究 発 表 —

Anne of Green Gables における green が伝える意味

徳島大学大学院博士前期課程 なかはた 中畑 あかり 明理

L. M. Montgomery 作 *Anne of Green Gables* では、主人公アンの居場所となる Green Gables の green、アンの髪の色である red 等、色彩語が多用され、本作品において色彩語が重要な役割を有すると考えられる。用いられる色彩語の中でも群を抜いて出現頻度の高い green は、特に重要な色彩語であるとの仮説から、本発表では色彩語 green に注目し、それが伝える意味や本作品における役割、効果について明らかにする。

本作品で用いられる green のうち約 65% が Green Gables を示す表現であり、続いて約 10% が植物を表現する green である。一方、物語ではアンのアイデンティティである red hair との対比で green hair が描かれる場面が印象的だが、green hair の頻度は約 3% にとどまっている。定量的な観点では、green 一語で植物を表現する場合の多さから、本作品において green そのものが色彩を表現するだけでなく、植物の意味を伝える傾向にあると考えられる。加えて、本作品における色彩語 green のうち、hair と結びつく場合は red hair と対比し否定的な意味を、green で植物を表現する場合は肯定的な意味を伝え、もっとも出現頻度の高い Green Gables は、両義的な意味を伝えることを定性分析に基づき明らかにする。

本発表では、計量テキスト分析ツールを用いた定量的な分析に基づき、*Anne of Green Gables* における green について、色彩語 green が現れる文脈や歴史・文化的な背景を検討し、green が伝える意味に場合分けが可能であることを指摘する。

『リトル・ドリット』における『さすらい人』に対する引喩 — 救助の働きをする引喩としての『さすらい人』 —

無職 さだゆき 定行 え あし江

『リトル・ドリット』(*Little Dorrit*) はディケンズ(Charles Dickens)の後期の長編小説であるが、古英詩『さすらい人』(*The Wanderer*)を彷彿とさせる。『さすらい人』は古英語の哀歌で、八世紀に成立した。

第一に、この小説にはアルフレッド大王、ゴート族など古い歴史上の人物などの名前が出てくる。第二に Circumlocution Office という省の名前は、作者が意図したかどうかは不明であるが婉曲表現(kenning)を意識させる。第三に、『ピクウィック』(*Pickwick Papers*)の『旅商人の伯父の話』に対する引喩が使われていると思うが、この話の舞台の近く Holyrood の“rood”の語源は古英語である。第四に、ラヤモンの『ブルート』(*Lazamon's Brut*)に対する引喩も使われていると思うが、ラヤモンは 13 世紀初頭である。それなら 13 世紀よりもっと前の何かがあるのではないかと思った。第五に、『リトル・ドリット』のアーサー(Arthur)は運命の波に押し流されて生きる“wanderer”であり、この小説には孤独、冬、海、廃墟、懐旧、心の友、運命の大逆転などが描

かれているが、『さすらい人』にも同じような特徴がある。こうした点を鑑みて、『さすらい人』の英訳に対する引喩が用いられていると考えた。

この『さすらい人』の英訳に対する引喩であるが、小説の中で将来起きるできごとを予測するだけでなく、運命の波に流されてゆくアーサーを迫り来る危機から救う働きがある。これを、本発表ではレスキューallusion と名づけて考察する。

Way 構文の多様性と創造性について —drink one's way を中心に—

高知県立大学教授 かなざわ しゅん ご
金澤 俊 吾

英語の Way 構文は、主語の指示対象による、困難を伴う漸次的移動（位置変化）を表すのが基本とされる。

- (1) They made their way through the crowd / to the door.

Way 構文には、状態変化への推移を表す事例もある (cf. Kuno and Takami (2004) など)。結果構文もまた、前置詞句を伴う文法構造を取り、状態変化を表す事例がある (cf. Rappaport Hovav and Levin (2001), Goldberg and Jackendoff (2004), Iwata (2020) など)。Luzondo (2014) は、この二つの構文の類似性に着目し、Way 構文が、結果構文と「家族関係」にあるという分析を試みている。

本発表の分析対象である drink one's way は、前置詞句を伴い「飲む」動作と関連したさまざまな変化を表すことができる。たとえば、drink one's way through NP は、時間をかけて飲み物を消費する状況を表している。

- (2) Sally drank her way through a case of vodka. (Goldberg 1995: 204)

また、drink one's way to NP は、「飲む」動作によって、健康状態や特定の状況への変化を表すことができる。

- (3) a. You can actually drink your way to better health... (Web)

- b. ... to pay for a place to sleep and a few beers to drink our way to a solution. (COCA)

さらに、形容詞句や、飲み物を表す名詞から転換した動詞が用いられる事例も見られる。

- (4) Drink your way healthy. (Web)

- (5) a. ... juice your way to optimum health. (Web)

- b. HOW TO WINE YOUR WAY TO GOOD HEALTH (Web)

本発表では、drink one's way の一連の事例は、Way 構文の基本事例の文法構造と属性を保持しつつ、さらに新たな構成要素から成る拡張事例を体系的に創出していることを明らかにする。また、当該事例の多様性と創造性は、動詞から喚起される場面とそれに対応した結果状態の関係が、多様な構成要素の組み合わせとして具現化されることに起因していることを示す。

『ユリシーズ』十八挿話におけるモリーの過去 —ジブラルタル・ノスタルジア・異種混濁性—

熊本高等専門学校准教授 ^{いわした} 岩下 いずみ

本発表では、ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』の主人公レオポルド・ブルームの妻モリー・ブルームの過去が語られる第十八挿話の再考察を通して、彼女が思い起こすジブラルタルの描写やその特徴から、作品全体にも通底するノスタルジアと異種混濁性を探究したい。その上でブルーム夫妻とその一人娘モリーが移民の出自をもちながらアイルランドで生きることによってジョイスが託している意義を考える。モリーはジブラルタル出身のユダヤ系アイルランド人で、父親はジブラルタル要塞でイギリス海軍士官として働いていたアイルランド人である。さらに、ユダヤ人の母親とは幼くして生き別れたようである。これらの点から、なぜジブラルタルなのか、そしてなぜ彼女にこのように複雑な要素が与えられているのか、という起点から考察を進める。さらにモリーが過去を思い起こす際、痛み・喪失の表象を伴うことに着眼し、作品でたびたび見られる「もの」（夫婦のベッド、写真など）にまつわるノスタルジアをジブラルタル表象と考え合わせる。これらから、モリーに備わっている異種混濁性がアイルランド社会で示す未来について、ジブラルタルとアイルランドを結びつけながら論考する。この考察によって、今までの『ユリシーズ』十八挿話研究に新たな光をあて、出版百年を超えた現在の新たなモリー像研究、『ユリシーズ』研究の一端としたい。

Ulysses における病とケア —第 18 挿話“Penelope”を中心に—

熊本保健科学大学准教授 ^{たなか えり} 田中 恵理

James Joyce の *Ulysses* (1922) 第 18 挿話“Penelope”は、8 つの節からなる Molly Bloom の内的独白で、コンマのない文章が滔々と綴られる。Molly の回想は多岐に渡るが、中でも男女の身体に対する Molly の強い関心と彼女の性的欲望は様々な議論を呼んできた。Joyce 自身も友人に宛てた手紙の中で“Penelope”について、「私はいつでも肯定する肉体なのです」(*Selected Letters* 285) と *Faust* からの引用をもじって語っていることなどから、“Penelope”では身体が重要なテーマの一つとされる。ところが、人間の身体経験でもある「病」に注目した論考はあまり多くはない。“Penelope”では、病がいくつか言及されており、さらに Molly 自身体調に不安を感じていると読み取れる箇所がある。そしてそれらを考慮するならば、Molly は病に対して意識的で病に苦しむ他者への共感、つまり「ケア」の心があると捉えることができると考える。ケアする人物としては、これまで平和主義者の Bloom が取り上げられることが多かった。しかしながら、Molly も他者に対する気遣いを見せているのであって、それは“Penelope”における病の描写を通して示唆されている。本発表では、*Ulysses* 第 18 挿話“Penelope”を中心にこれまであまり注目されてこなかった病とケアの描写を分析する。その際、19 世紀後半から 20 世紀初頭の社会的背景や Joyce 自身と家族の病歴も明らかにしながら考察することで、よりアクチュアルな病・ケア表象を捉える。

モリー・ブルームは、なぜ歌手なのか？ —『ユリシーズ』第18挿話における歌の分析—

愛知淑徳大学非常勤講師 やまだ さちよ
山田 幸代

小説 *Ulysses* (1922) の主人公の一人 Molly Bloom の職業は、歌手である。そのため『ユリシーズ』第18挿話におけるモリーの意識の流れには、過去にコンサートの舞台に立ったこと、翌週もコンサートツアーの一員として歌う予定であることなどが言及されている。だが James Van Dyck Card も指摘するように、テキストに描かれた歌手としてのモリーの姿は、いくつかの点でプロとして稼げるレベルとは言い難い。またジョイスは短編集 *Dubliners* (1914) でも歌手を生業とする女性たちを描いており、当時のアイルランドには音楽の世界で活躍する女性が少なからず存在したが、そういった女性の姿と比べてもモリーの職業歌手としての描写はリアリティに欠けている。ではなぜ、モリーは歌手なのか。言い換えれば、なぜモリーはあまり歌手らしくない歌手として描かれているのだろうか。第18挿話には約20曲の歌の歌詞が引用されており、モリーのモノローグには自分の言葉のように自然と歌詞が入り込んでいることから、彼女のアイデンティティ形成において歌が不可欠なものであることが読み取れる。また小説全体の主題の一つであるモリーの不倫は、歌手であるという事実によってリアリティが増している。本発表では、テキストに引用された歌の歌詞を読み解くことで、その効果と意義について考察したい。

The Great Gatsby における父性の揺らぎとサバイバーズ・ギルト

広島大学大学院博士課程前期 わたなべ ともなり
渡部 智成

本発表は、F. Scott Fitzgerald の *The Great Gatsby* (1925) における父性像と戦争トラウマについて、精神分析批評の理論的枠組みから論じる。近年 Licari (2019) や Pretorius (2021) によって、本小説における戦争体験の重要性が論じられてきたが、本研究はこれらを発展させ主人公 Jay Gatsby の父性像の脆弱さと再構築、そしてサバイバーズ・ギルトと贖罪との連関に焦点を当てる。まず Fitzgerald の父親の貧困を背景に *Gatsby* の実父像に作者の父親像が反映されていることを論じる。*Gatsby* がファミリー・ロマンス理論に基づき、弱い実父を否定し強い代理父を求め、エディプス・コンプレックス理論における同一化を試みる様相を分析する。次に *Gatsby* が第一次世界大戦において分遣隊を率いた経験が、彼の脆弱な父性像の再構築と仲間意識 (comradeship) の形成に繋がった過程を明らかにする。作者自身も軍での訓練を通じ仲間意識を形成し、死を強く意識したことが後のサバイバーズ・ギルトの根源になったことを指摘する。最後に *Gatsby* が戦死した戦友へのサバイバーズ・ギルトを Daisy の救済に転移させ、贖罪として罪を肩代わりしようとしたことを分析する。さらに Fitzgerald 自身もまた自己投影した *Gatsby* の死を描くことで自らのサバイバーズ・ギルトの贖罪を試みていることを論じる。本研究は、*Gatsby* の父性像と戦争体験、サバイバーズ・ギルトを有機的に結びつけることで新たな解釈を提示し、*The Great Gatsby* 研究の深化に寄与するものである。

アーネスト・ヘミングウェイの「兵士の故郷」における「吐き気」と語りの抑圧

広島大学大学院博士課程後期 ひでしま ゆりこ
秀島 由里子

アーネスト・ヘミングウェイの短編小説「兵士の故郷」(1925)は、第一次世界大戦から帰還した主人公クレブスが故郷の環境に適応できず、家庭内外における価値観のずれの中で苦悩する姿を描いた作品である。本発表では、作中に二度登場する「吐き気」という身体反応に注目し、それが戦争トラウマだけでなく、語ることへの葛藤や自己像の揺らぎと深く関係していることを考察する。

クレブスは、自らの経験をありのままに語りたいという衝動に駆られるものの、その語りは社会や家族の期待によって歪められ、その葛藤が身体症状としての「吐き気」として現れる。また、母親がクレブスに課す「理想の息子」像が、彼の男性性や主体性を否認し、語りそのものを抑圧していることにも焦点を当て、彼の自己像の揺らぎに迫る。

一方、妹ヘレンとの関係においてのみ、クレブスは語ることに成功しており、そこに語りの再生、すなわちトラウマ回復の可能性が示唆される。「吐き気」という身体的反応を手がかりに、語ることと癒しの関係、そして戦後社会における語りの困難を新たな視点から読み解くことが本発表の目的である。

『ハックルベリー・フィンの冒険』における水と想像力

甲南大学准教授 はまもと りゅうぞう
浜本 隆三

マーク・トウェイン(Mark Twain, 1825-1910)の長編冒険小説『ハックルベリー・フィンの冒険』(*Adventures of Huckleberry Finn*, 1885)は人種問題や社会批判など、これまでに数多くの批評にさらされてきた。だが雄大なミシシッピ河畔を舞台としながらも、環境文学批評からの考察は十分に行われてきたとは言いがたい。その理由は、本作のための下見を行なったときに記した旅行記『ミシシッピ河畔の生活』(*Life on the Mississippi*, 1883)においてもみられる通り、蒸気船のパイロットであったトウェインが文明社会や進歩史観に対して相反する姿勢に立っていたことに起因しているかもしれない。しかし近年、環境文学批評において注目を集めるブルー・ヒューマニティーズの批評に視座を借ると、この作品の軸をなすミシシッピ川が、物語の主体として人間社会に流動性をもたらし、人間中心主義を相対化している点に気づかされる。

本発表では、水域から文明社会を捉えるブルー・ヒューマニティーズの視座に立ち、本作における川の役割について考えるとともに、さらに踏み込んで、水が物語を生み出す力に注目して作品を再考してみたい。この作品における水の役割を幅広い角度から検討できればと考えている。

英語習熟度の異なる学習者ペアによる英語詩の読解プロセスの分析 —教材開発に向けた基礎的検証—

かたやま はな
広島大学大学院博士課程後期 形山 羽奈

本研究の目的は、英語習熟度の異なる2人の英語学習者によるペア読解 (dyad reading) における読解プロセスを分析し、英語詩を教材として用いることの教育的有用性を検証するための基礎的データを提示することである。本研究における「読解プロセス」は、Hanauer (2001) の定義を参考に、第2言語習得との関連性に着目し、ペアによる英語詩の読解活動における一連の進行過程として捉える。具体的には、読解の進行における学習者の経験をたどり、ペア読解を構成する要素やそのパターン、各時間帯に出現する構成要素とその配列・展開を記述する。

近年、日本人英語学習者に対する英語詩の教育的意義が注目されつつあるものの、その効果を実証的に裏付けるデータは依然として十分に蓄積されていない。特に海外の先行研究では、上級レベルの学習者同士による英語詩の読解が、学習者の英語表現への気づきを促し英語習得に有効であることが示唆されているが、習熟度に差のあるペアの場合の読解プロセスや学習効果については十分に検討されていない。

本発表では、英語習熟度の異なる学習者ペアを対象としたパイロットスタディに基づき、英語詩の読解プロセスの記録を分析した結果を報告する。

Social Learning Spaces in a Japanese University: A Study of Awareness, Usage, and Barriers

岡山大学大学院博士後期課程 Wang Jingzhou

The purpose of this study is to explore factors affecting Japanese students' participation in a university-based social learning space, by analyzing their awareness, actual usage, and perceived barriers to engagement. A survey was conducted at a regional national university in Japan in July 2025, with a total of 217 Japanese student respondents. Data were quantitatively and qualitatively analyzed to identify key patterns.

Findings revealed that awareness of the social learning space among Japanese students was notably high (94%, n=217), yet actual participation remained limited, with only 18% (n=210) of respondents reporting usage experience. Among students aware of but not utilizing the space, key barriers included a lack of interest or perceived necessity, difficulty understanding the atmosphere and participation guidelines, and anxiety stemming from language proficiency combined with social isolation concerns.

The results indicate three key areas requiring attention to enhance student participation: (1) Clarifying participation methods and rules, (2) Creating opportunities that facilitate easy entry and participation for beginners or single participants, and (3) Addressing linguistic and interpersonal anxieties to establish psychological safety. These insights offer practical guidance for universities aiming to improve engagement and effectiveness of their social learning environments.

日本の世界遺産資料に関わるエコ・コミュニケーション分析 —英語を通じた環境教育への貢献を目指して—

岡山大学専任講師 よしだ あずみ
吉田 安曇

近年、翻訳における環境的概念の表現を文体の観点から評価する環境文体論 (ecostylistics) が注目されている。具体的には、世界遺産 (姫路城・清水寺・富士山等) の観光説明文において、機械翻訳と人間による翻訳とを比較しながら、文体や語調がどのように環境意識を変容させるかが分析されている (寺西・吉田 2024)。翻訳とは、単なる意味の移動ではなく、リズム、語調、文化的含意といったスタイルの再構成でもある。とりわけ環境や自然を描くテキストでは、言語選択が読者の情緒や生態的理解に強く影響する。本発表では、世界遺産である日光東照宮で収集した観光資料を、語彙選択、叙述構造、評価語の使用、象徴性等を考慮しながら、翻訳及び環境文体論の観点から分析する。さらに、翻訳の「正確さ」と異文化的配慮に着目した分析に加え、テキストの「環境意識度」 (Virdis 2022 参照) についても考察する。特に、(1) 原文と英語訳の違い、(2) 環境意識を高める内容や文体の特徴、(3) エコ・コミュニケーションはどのように環境教育へ寄与できるのか、の3点に焦点を当て考察を試みる。翻訳と文体論に基づく分析は、エコ・コミュニケーションをより深く、批判的に理解するための有効な手段であり、「自然」に内在するテキストを精査することは、環境教育や実践的語学教育に加え、心身の健康促進にもつながる意義深い営みであることを論じたい。

第二日 — シンポジウム —

終わりなき怪談 —ラフカディオ・ハーンと再創造の力—

(司会) 島根大学准教授 みやざわ ふみお
宮澤 文雄

ラフカディオ・ハーンはかつて東京帝国大学の講義「文学における超自然的ものの価値」のなかで、「霊的なものには必ず一面の真理があらわれている」と言い、幽霊の存在が信じられなくなったとしても、その真理への関心が人々から失われることはないと言った。この言葉から、ハーンがいかに怪談を重要な文学と見做していたか窺い知ることができる。その意味で、「耳なし芳一の話」や「雪女」などの傑作を数多く収録する晩年の作品集『怪談』は、ハーンの文学的達成をはかるうえで重要な作品といえるだろう。昨年はちょうど『怪談』出版とハーン没後 120 年にあたり、本シンポジウムに登壇する小泉凡氏が以下で指摘しているように、ハーンの怪談は、いま多方面から関心が寄せられている。そうした動向を背景に、本シンポジウムでは、ハーン作品をあらためて読み直し、怪談がもつ親和性や新たなつながりを生み出す働きをとらえ、ハーンの怪談がどのような可能性に開かれた文学であるのかを考えてみたい。

霊性の文学の復権 —震災後文学として怪談を読む—

(講師) 島根大学准教授 みやざわ ふみお
宮澤 文雄

東日本大震災以降、自然災害に対する社会的な関心が文学にも波及すると、災害を描いた過去の文学作品が見直されるようになった。そのひとつに、“tsunami”という言葉の世界に紹介したことで知られるハーンの「生神様」がある。これは、地震津波から村人の命を救った男が生神になるという物語を通して、日本人の民俗神道の様子を語った作品である。本作は、ハーンの死後、ある小学校教員によって再話され、「稲むらの火」と題名を変えて、国語教材に採用された。その後、一度は教科書から消えてしまうものの、半世紀を経て、今度は地震学者の筆によって被災した村の後日譚としてよみがえる。こうした教材化や世界的普及によって、「生神様」は、防災教育への貢献という点で評価を高めたといっばうで、ハーンと震災の関連性を「防災」に限定することにもなった。

だが、ハーンの文学と震災の関係はもっと豊かな地平に開かれている。本発表では、東日本大震災という現代の文脈からハーン作品を読み直す。具体的には、怪談をはじめとする霊性の文学と《震災後》の状況が重なり合うことを指摘し、震災が描かれていない作品に《震災後》の状況を読み込んでいくことによって、ハーンの怪談文学の想像力がもつ今日的意義を探ってみたい。

ホーイチからホーライへ —〈裸の詩〉としての『怪談』—

(講師) 明海大学講師 よこやま りゅういちろう
横山 竜一郎

19世紀から20世紀にかけて、西洋文学では伝統的な韻文詩だけでなく自由詩や散文詩と呼ばれる（やや曖昧な）ジャンルが台頭した。ハーンが東京帝国大学の講義で述べた〈裸の詩〉という独自の概念も、この文脈に位置づけられるだろう。曰く、真の詩とは韻律などの装飾を剥いても情感を保つものであり、別の言語の散文に移しても感動を与えるという。本発表は、『怪談』の物語パートの最初と最後に置かれた「耳なし芳一の物語」と「蓬萊」を主に取り上げながら、〈裸の詩〉が狭義の詩文学にとどまらない芸術の創作と受容においていかなる実践的な意味をもちうるかを探る。盲目の琵琶法師＝吟遊詩人ホーイチにハーンの自画像を透視する従来の解釈を拡張すれば、『怪談』という書物は〈裸の〉詩集として読み直すことができるかもしれない。その試みはまた、ハーン研究を超えて現代における詩的なものの意義について考える機会にもなるはずだ。発表ではまず、現代日本の詩人吉増剛造の講義録「耳なし芳一の方へ」から出発し、アメリカのイマジスト詩人エイミー・ローウェル、駐日英国連絡公館の文化使節も務めたスコットランド詩人G・S・フレイザーなどを経由しながら、ハーン文学の詩的なポテンシャルを論じたい。

Ghostly な交流が生む創造の連鎖 —怪談物語のダイナミズム—

(講師) 福岡女子大学教授 ながおか しんご
長岡 真吾

本発表では三つの観点からハーンの怪談物語への考察を試みる。ひとつはハーンが「一滴の露」で示している個別性と全体性の対比である。この小編のなかでハーンはひとつの水滴を宇宙全体の広がり映し込む個体としてとらえ、そのスタティックな個性が転生するダイナミックな全体性と連続的／補完的に存在することを示唆している。二つめは、ハーンの作品に特徴的な二重構造としての世界観である。「一滴の滴」においても個別性と全体性は“ghostly”というハーン特有の世界観によって繋がれていると考えられるが、ghostly な世界と現実世界との不可分の共存は、一方で個別の人体が宇宙や天体と呼応する「世界靈魂 (アニマ・ムンディ)」の思想にも繋がっている点があり、他方ではアニミズムに接続する。三つめの観点として、文学としての怪談が持つ物語構造がある。ハーンの怪談を修辭的に見直した場合、個別性と全体性が交差し二重構造が通底するそれらの物語には特徴的な欠落がしばしば認められる。この欠落は怪談の再読と再考を促す主要な要因となっているばかりでなく、多くの二次創作や翻案を生んでいく原動力になっていると考えられる。また、その欠落が怪談を読者自身の物語として読む物語の共有空間にもなっていると思われる。以上の三つの観点を「耳なし芳一」などにも言及しつつ「雪女」を対象に考えていきたい。

現代に生きる怪談 —「つながりの文学」としての意味—

小泉八雲記念館館長・島根県立大学名誉教授 こいずみ ほん
小泉 凡

近年、ハーンが妻セツとともに紡いだ怪談作品は、さまざまな芸術表現で現代社会に蘇っている。2022年にミラノで開催された八雲の怪談作品をテーマとする没入型展示には9万5千人が訪れ、2024年にはニューオーリンズのマルディグラ・カーニバルのパレードで、「耳なし芳一」や「雪女」など26台の八雲作品をテーマにした山車が見物客の前を練り歩いた。2023年にアイルランドのアーティストたちが発案した版画と写真による怪談アート展は、いまでも日本とアイルランドの両国を巡回し、さらにイギリスへも巡回する予定だ。夜の松江を語り部の怪談に耳傾けながら歩く「ゴーストツアー」は昨年より予約が取れない状況が続く。

ハーンはE.B.タイラーの著書『原始文化』を愛読しており、とくに“transmigration (転生)”の説明に鉛筆で印をつけていることから、循環的生命観に共感していたことが伺われる。われわれは、「前世に生きていた生命のかげらが無尽量に寄り合わさったものだ」(「塵」と言い、「輪廻転生の考え方は死の恐怖を軽減し、人生に美しい影響を与える」(1891年8月27日付チェンバレン宛書簡)とも言っている。八雲の一連の怪談作品は、東洋と西洋をつなぐばかりでなく、人と自然、生者と死者、現実世界と超自然の世界をつなぐ役割を担っているように思われる。分断、対立、戦争が続く現代に、「つながりの感覚」が得られる文学と言えるのではないだろうか。

— 交通案内 —

大学所在地

〒780-8515 高知市永国寺町2番22号



大学への主な交通機関

【高知龍馬空港から】

- タクシー・バイクをご利用の場合/約 35 分
- バスをご利用の場合/永国寺キャンパスまで約 50 分
空港連絡バス（外部サイト：[とさでん交通・高知駅前観光](#)）を利用して「JR 高知駅」または「はりまや橋観光バスターミナル」までお越してください。

【JR 高知駅から】

- 車・タクシー・バイクをご利用の場合/約 5 分
- 徒歩の場合/約 20 分
- 自転車の場合/約 10 分

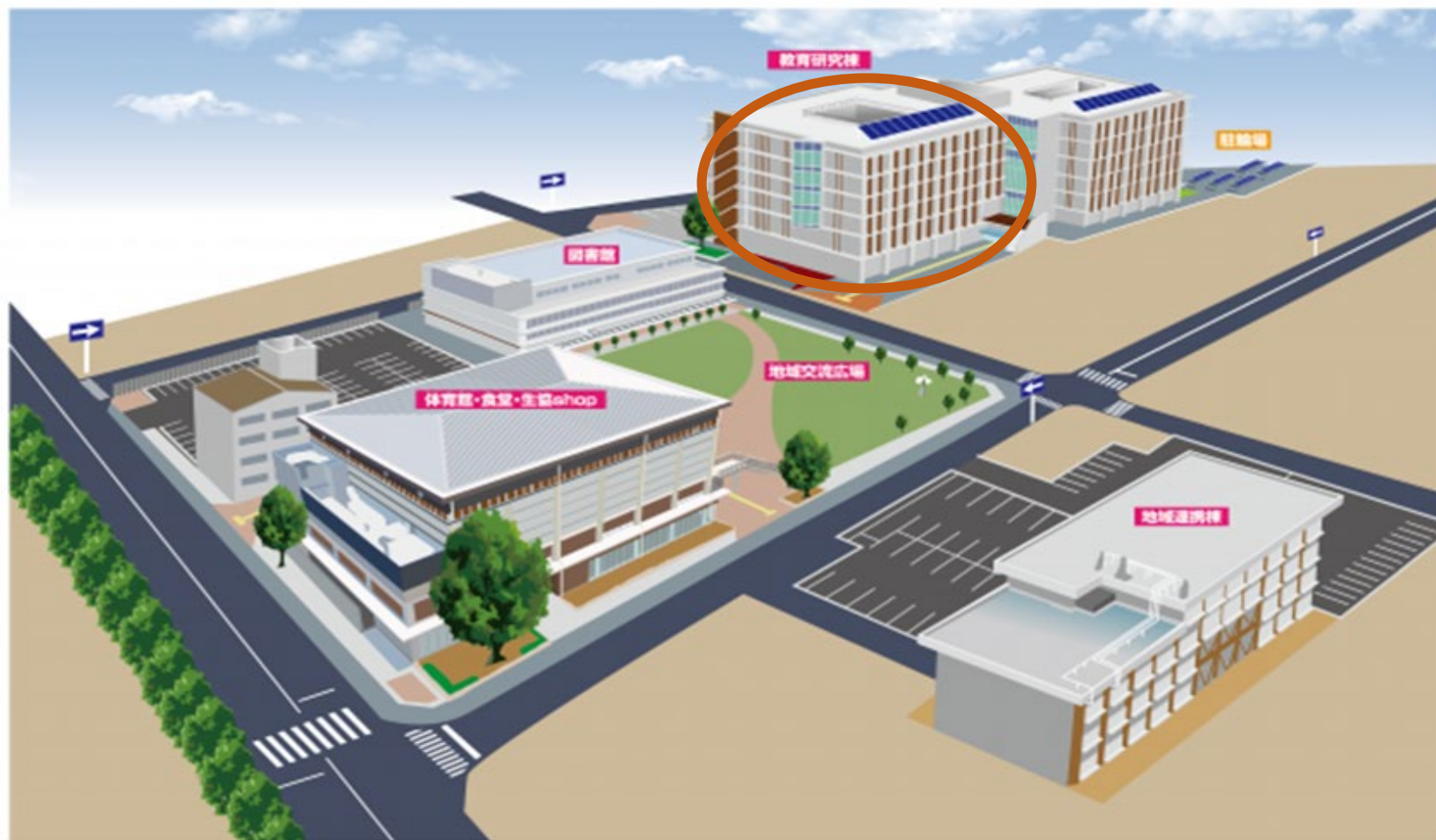
【はりまや橋から】

- 車・タクシー・バイクをご利用の場合/約 5 分
- 徒歩の場合/約 20 分
- 自転車の場合/約 10 分

※所要時間は目安です。交通状況によっては、時間がかかる場合があります。

※キャンパス内には駐車場がございませんので、自家用車でのお越しの場合には近隣の有料駐車場をご利用ください。

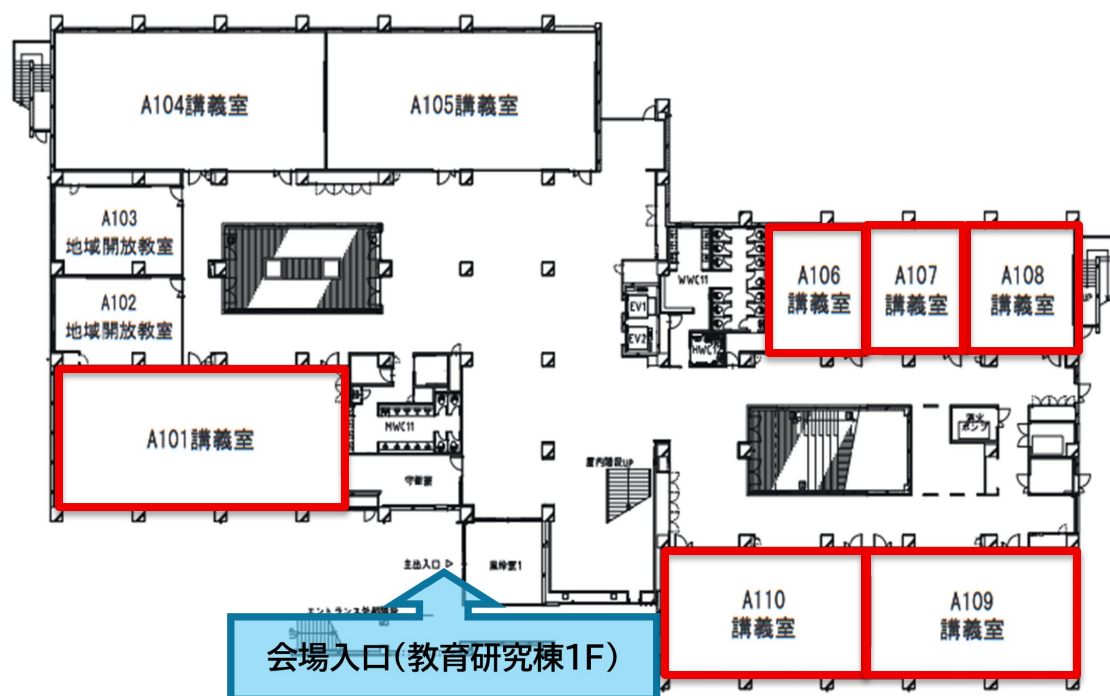
— 建物配置図 —



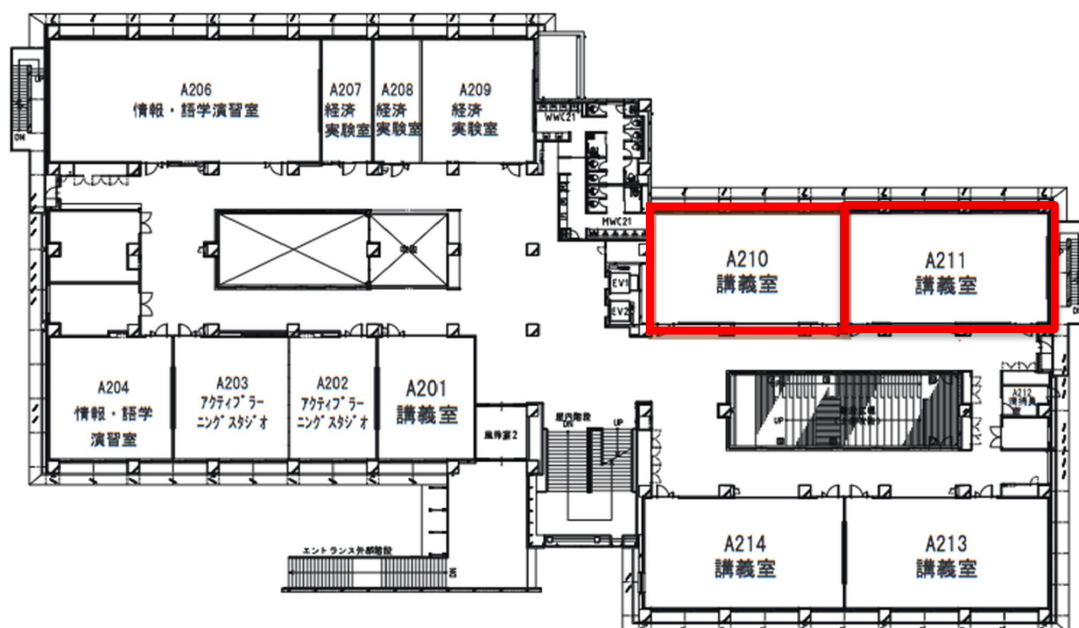
— 建物配置図 —

各会場一覧

教育研究棟 1 階



教育研究棟 2 階



— 会場のご案内 —

受 付	教育研究棟	1 階ロビー	研 究 発 表 会 場		
書籍展示場	教育研究棟	1 階ロビー	第 1 室	教育研究棟	A210 教室
開会式・総会 閉会式	教育研究棟	A101 教室	第 2 室	教育研究棟	A101 教室
特別講演	教育研究棟	A101 教室	第 3 室	教育研究棟	A109 教室
シンポジウム	教育研究棟	A101 教室	第 4 室	教育研究棟	A110 教室
特別講演・シン ポジウム講 師控室	教育研究棟	A106 教室			
研究発表者・ 司会者控室	教育研究棟	A106 教室			
会場校役員・ 関係者控室	教育研究棟	A107 教室			
役員・事務局 控室	教育研究棟	A108 教室			
一般会員控室	教育研究棟	A211 教室			

※今大会では、会場内及び会場校近隣で託児サービスを提供できないこととなりました。会員の皆様には大変ご不便をおかけすることとなり、申し訳ございません。会場校から離れた箇所に 1 か所託児サービスを提供している業者がありますので（タクシー等を利用して行き来していただく形になるかと思われます）、ご利用を検討される方は事務局（chu-shi@elsj.org）までお知らせください。業者の案内や利用料補助等の詳細につきまして、個別に相談させていただければと存じます。

※大会中は、食堂・売店は営業しておりません。昼食等は近隣のコンビニエンスストア、食堂、レストランをご利用ください

※会場校では教室内での飲食は認められておりませんのでご注意ください（水分補給目的の水筒・ペットボトル等は可）。

— 懇親会のご案内 —

開始時間： 午後 5 時 30 分

会 費： 5,000 円

会 場： 高知県公立大学生協永国寺キャンパス食堂

※日本英文学会中国四国支部ホームページよりお申し込みください。